

【様式7】整理表(項目別評価)

評価項目(年度実施計画)		研究所等の自己評価		畜産センター 評価委員会評価	
		評価	計画達成の状況	評価	評価における特記事項
i) 県民 に対して 提供 する 業務	1) 試験研究	A	<p>○質・量の両面において概ね令和2年度計画を達成</p> <p>1 デヒドロエピアンドロステロンを用いた牛体内胚採取成績向上に関する試験研究 黒毛和種繁殖雌牛の血中DHEA等の濃度と採卵成績の関連性を分析し、血中DHEAが採卵成績の指標となるか、また、DHEA-S投与により採卵成績の向上方法を明らかにし、より効果的な採卵方法の確立を目的とした。 繁殖雌牛の血中DHEA-S濃度と採卵成績の関係を分析すると、血中DHEA-S濃度とA・A'、Bランク卵率との間に弱い正の相関がみられるなど、血中DHEA-S濃度は採卵成績の指標となる可能性が示唆されるなど、基礎研究としての目的は達成できた。</p> <p>2 地鶏のおいしさに関連する遺伝子の解明及び次世代鶏作出技術の確立 奥久慈しゃものおいしさを維持しつつ、近交退化を抑制することができるしゃも種の次世代鶏作出技術の確立等について検討した。 その結果、外部から導入した同種別系統鶏に既存しゃも種を一度戻し交配した鶏種(B1)で、近交度が低下し、生産成績は既存しゃも種と同等以上を示した。また、B1を用いて作出した肉用鶏の食味は既存の奥久慈しゃもと差が見られなかったことから、既存しゃも種をB1に入れ替えることでおいしさを維持しつつ、種鶏の近交度の低下が期待できる。 以上の成果について、今後の奥久慈しゃもの種鶏の維持等に役立てていく。</p> <p>3 ウェットエイジング並びに加熱による化学的变化が牛肉のおいしさ向上に及ぼす影響に関する試験 常陸牛の熟成及び加熱による化学的变化を明らかにし、常陸牛に特徴的なおいしさに影響を及ぼす因子を探索した。 その結果、熟成により遊離脂肪酸、遊離アミノ酸等が増加することが明らかとなり、それを加熱することで低級脂肪酸アルデヒド類が増加するなどを解明した。また、官能評価で低級脂肪酸アルデヒド類等はおいしさ向上に影響を及ぼすことが示唆された。 今後、肉の部位や熟成方法等の違いによるおいしさや香りの変化についても検証し、これらの成果とともに活用していく。</p>	A	○質・量の両面において概ね令和2年度計画を達成
	2) 相談業務・依頼分析	A	<p>○質・量の両面において令和2年度計画を達成</p> <p>【技術相談】 畜産農家等からの技術相談などに対しては、随時対応し、助言・指導を行った。 ・畜産農家及び畜産技術者(獣医師等)からの技術相談 126回/年 主な相談内容(種畜の交配方法、牛の繁殖技術、飼料調製法、家畜排せつ物処理等) ・企業及び一般県民からの技術相談 1回/年 主な相談内容(酵母抽出物の家畜飼料への応用)</p> <p>【依頼分析】 自給飼料の分析や家畜ふん堆肥の分析を通して農家の経営向上に貢献することができた。農林事務所等からの依頼分析の減少等により自給飼料の分析点数は少なかった。 ・自給飼料依頼分析 54点/年 ・家畜ふん堆肥等の依頼分析 57点/年 ・飼料作物サイレージ共励会への協力 1回/年</p>	A	○質・量の両面において概ね令和2年度計画を達成
	3) 指導業務	AA	<p>○質・量の両面において目標を超えた優れたパフォーマンスを実現</p> <p>研修会、講習会等または生産現場において、研究成果等の技術指導、情報提供を積極的に実施した。団体等が主催する研修会等においても成果等の情報提供を行った。 受精卵移植技術の指導の他、肉用牛研究所では、高能力種雄牛に関する情報提供、養豚研究所では「ローズD-1」等に関する指導を重点的に行うことで改良を促進し、優良家畜の増頭に貢献した。 ・研修会、講習会等での技術指導、情報提供 畜産センター本所 66回/年 肉用牛研究所 84回/年 養豚研究所 39回/年 計189回/年</p>	AA	○質・量の両面において目標を超えた優れたパフォーマンスを実現
	4) 施設・設備利用	B	<p>○質あるいは量において取り組みが不十分</p> <p>畜産関係団体や県民に対して、分析機器等の利用開放を行った。 ・分析機器等の外部利用 (90回/年)</p>	B	○質あるいは量において取り組みが不十分

【様式7】整理表(項目別評価)

評価項目(年度実施計画)	研究所等の自己評価		畜産センター 評価委員会評価	
	評価	計画達成の状況	評価	評価における特記事項
5)成果の普及活用促進	A	<p>○質・量の両面において概ね令和2年度計画を達成</p> <p>今年度から組織再編により普及センターの畜産職員を移動し、農林事務所畜産振興課を新設したこと、鳥インフルエンザ発生により成果検討会を中止したことなどから、成果の普及促進は例年より順調とは言えないが、成果の普及方法については、検討を行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・成果検討会の開催 中止 ・「普及に移す成果」 0件/年 ・普及推進計画活動、技術体系化チーム活動、現地検討会等の活動等 4回/年 ・査読付き学会誌等への論文発表 2本/年 ・学会発表 6回/年 	A	○質・量の両面において概ね令和2年度計画を達成
i) 県民に対して提供する業務	A	<p>○質・量の両面において令和2年度計画を達成</p> <p>センター主催による家畜人工授精講習会の開催及び家畜商講習会の開催支援、家畜審査競技会の指導を行ったほか、新規繁殖和牛入門講座を開催し、人材の育成を図った。県立農業大学校と連携し、学生の指導を行った。インターンシップ受講学生は茨城県の畜産に大いに興味を持った。</p> <p>常陸牛共励会や豚枝肉共励会等の審査や講評を行い、県銘柄畜産物の品質向上や畜産農家の技術向上に貢献した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・家畜商講習会開催支援 1回/年 ・家畜人工授精講習会の開催(センター主催)及び開催支援(大学等主催) 5回/年 ・畜産共進会・共励会等における審査 16回/年 ・インターンシップ(大学等)の受入れ 0名/年 ・畜産教育支援(県立農業大学等へ講師派遣(実習指導)8名/年 ・大学学生・院生、県立農業大学校等研究科等学生の受け入れ(要望無し) ・酪農・畜産物加工体験受入れ 0名/年 	A	○質・量の両面において概ね令和2年度計画を達成
7)知的財産権の取得・活用及び優良遺伝資源の供給	A	<p>○質・量の両面において概ね令和2年度計画を達成</p> <p>種雄牛凍結精液、牛受精卵、系統豚及び地鶏種鶏については、畜産農家等の要望に応えて供給した。種雄牛精液と牛受精卵については、広報の強化と採卵回数を増やす等により計画を上回って供給し、農家の経営向上に貢献した。系統豚の供給も農家の改良意欲の高まりにより供給頭数が増加し、常陸牛、ローズボークのブランドアップに貢献した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・種雄牛精液供給本数 5,927本 ・場内供卵牛からの受精卵供給個数 281個 ・農家繋養牛からの受精卵採取 231個 ・系統豚等供給(種豚) 153頭(うちローズD-1 75頭) ・系統豚等精液供給 3,130本(うちローズD-1 3,007本) ・地鶏生産用種鶏供給 2,250羽 ・種畜造成登録、牧草品種登録及び特許取得件数 2件 	A	○質・量の両面において概ね令和2年度計画を達成
8)広報・普及啓発	A	<p>○質・量の両面において概ね令和2年度計画を達成</p> <p>試験研究で得られた成果は、主要成果集や研究報告、ホームページ及び畜産関係書誌を使い、積極的に情報発信した。農家等への出張に際しては積極的に情報を提供し、現場への定着に努めた。学術成果は、積極的な発表に努め、他研究機関との共同研究や情報共有につながっている。</p> <p>また、各種情報は随時ホームページとフェイスブックで提供し、畜産の技術情報を迅速に発信できた。フェイスブックは消費者も含めた情報発信・拡散につながった。なお、公開デーは、新型コロナウイルス感染防止のため中止した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「主要成果」の公開 1回 ・「研究報告」の発行 1回 ・畜産センター公開デーの開催 中止 ・酪農・畜産物加工体験の実施 実施せず ・ホームページ、フェイスブック等による情報発信 97回/年 ・「畜産茨城(県畜産協会発行)」「農業茨城(県農業改良協会)」等への寄稿 10回 ・査読付き学会誌等への論文発表 2本/年 ・学会発表 6回/年 	A	○質・量の両面において概ね令和2年度計画を達成

【様式7】整理表(項目別評価)

評価項目(年度実施計画)		研究所等の自己評価		畜産センター 評価委員会評価	
		評価	計画達成の状況	評価	評価における特記事項
ii) 業務の質的向上・効率化のために実施する方策	1) 全体マネジメント	A	<p>○質・量の両面において概ね令和2年度計画を達成</p> <p>畜産センター、肉用牛研究所、養豚研究所が連携を図り、連絡調整会議等を開催し、情報を共有しつつ試験研究を推進した。</p> <p>また、研修等で得た知識を活用した勉強会や伝達研修等をおし、職員全体のスキルアップに努めた。</p> <p>研究課題については、県民ニーズの把握から新規課題を検討し、内部・外部評価を受けて実施した。なお、評価結果はホームページで公開し、情報発信した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・畜産センター・研究所連絡会議 12回/年 ・試験研究課題内部評価委員会の開催 1回/年 ・試験研究課題評価委員会の開催 1回/年 ・試験研究機関評価委員会の開催 1回/年 ・主要成果発表会 1回/年 ・試験研究課題進捗状況の確認(各所) 12回/年 	A	○質・量の両面において概ね令和2年度計画を達成
	2) 県民(企業、農業者等)ニーズの把握	A	<p>○質・量の両面において概ね令和2年度計画を達成</p> <p>各種会議で要望を把握した。特に、農業経営士協会とは会議の他に研修会を開催し、研究ニーズの把握に努め、研究課題の設定に繋がった。</p> <p>【センター主催会議】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・新規要望課題検討会によるニーズ把握 1回/年 ・消費者等を対象とした公開デー等での消費者ニーズの把握 2回/年 <p>【農業生産現場】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・現地試験の実施による生産者ニーズの把握 0回/年 <p>【生産者組織団体主催の会議】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・農業経営士等基幹農業者との意見交換会によるニーズの把握 コロナにより中止 ・畜産関係団体による会議(畜産協会、常陸牛振興協会、新ブランド豚肉確立研究会、養豚協会、奥久慈しゃも生産組合他) 20回/年 	A	○質・量の両面において概ね令和2年度計画を達成
	3) 他機関との連携	AA	<p>○質・量の両面において目標を超えた優れたパフォーマンスを実現</p> <p>他の研究機関と研究情報収集や連携を強め共同で外部資金研究に参画したほか、団体からの資金を活用して試験研究を推進した。</p> <p>【共同研究の推進】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大学との共同研究推進 5課題/年 ・国立研究開発法人機関との共同研究推進 8課題/年 ・県内研究機関との共同研究推進 1課題/年 ・他県研究機関との共同研究推進 7課題/年 ・民間との共同研究・研究協力の推進 4課題/年 <p>【普及組織との連携】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・試験研究推進・研究成果普及・技術指導のための専技室との連携活動 12回/年 <p>【行政機関・関係団体との連携】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・国立研究開発法人研究機関等主催事業の推進会議・ブロック担当者会議の参加・協力 30回/年 ・畜産関係団体等主催事業への参加・協力 29回/年 	AA	○質・量の両面において目標を超えた優れたパフォーマンスを実現
	4) 外部資金の獲得方針	A	<p>○質・量の両面において概ね令和2年度計画を達成</p> <p>国、国立研究開発法人及び団体等との連携から、新たな受託研究費を獲得できた。さらに、県内食品企業と団体から研究資金を獲得し、納豆菌等の有用微生物の効果に関する研究を継続するなど、外部試験の獲得増につながった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・国等の競争資金・(国)プロジェクト研究課題の応募採択 1課題/年 ・各種団体の委託研究への応募 6課題/年 ・企業の委託研究への応募 1課題/年 ・獲得研究費(6課題) 約33,000千円 	A	○質・量の両面において概ね令和2年度計画を達成
	5) 内部人材育成	A	<p>○質・量の両面において概ね令和2年度計画を達成</p> <p>国や独法が主催する研修制度を活用して知識を習得し、研究員のレベルアップを図った。また、学会や研究会に参加し、発表を行ったほか、他機関との交流を進めた。特に、新任研究員をはじめとして受講を大きく増やしたところ、基本スキル向上につながった。また、研究員の交流が共同研究や外部資金研究につながっている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・国、国立研究開発法人、独立行政法人等が主催する研修(中央畜産研修、依頼研究研修、短期集合研修)及び学会・研究会等への参加人数のべ29人/年 ・所内セミナー・職場研修会 研究倫理、動物実験、家畜衛生、GAP、健康管理等幅広く開催した。 11回/年 	A	○質・量の両面において概ね令和2年度計画を達成